# 令和元年度京都府総合教育会議概要

１　日　時　　令和２年２月 26 日（水）午後１時から２時 30 分まで
２　場　所　　京都産業大学むすびわざ館３階　教育委員室
３　出席者　　西脇知事、橋本教育長、上原教育委員（教育長職務代理者）、
　　安藤教育委員、千教育委員、安岡教育委員
４　次　第
（１）　開会
（２）キャリア教育の状況について概要説明
（３）意見交換
（４）その他
（５）閉会

―――――――――――――――――――――――　会議概要　―――――――――――――――――――――――

〇出席者紹介

〇知事あいさつ要旨

意見交換前に、新型コロナウィルス感染症について若干お願いする。

国内においても感染が拡大し、深刻な状況となっている。京都府では、２月５日以降、新たな感染は確認されていないが、全国的な状況は拡大傾向にあり、新たな感染者の可能性を十分に想定して対応する必要がある。

昨日、政府は新型コロナウィルス感染症対策の基本方針を決定したところであり、教育現場においても色々対応をしていただいているが、児童・生徒の安全の確保のために、教育委員会とも密接に連携し、国、市町村、医療機関等とともに、感染拡大防止に全力を尽くしてまいりたいので、引き続き、教育現場にもご協力、ご理解をお願いする。

本題に戻り、元年度の京都府総合教育会議について、本来はより早期の開催、そして頻度も上げた形で実施したかったが、この時期になったことをお詫び申し上げる。

教育委員の皆さんと密接に意見交換し、私自身もお願いしたいことが沢山あるが、今日はその中でも、キャリア教育のあり方をテーマとして、意見交換をしたい。

高校・大学卒業後、生徒や学生が、みずからの能力・適性を踏まえ、主体的に進路を選択するために、どういったキャリア教育が必要か問題意識を持っていたところ。

また、京都の場合、特に北部に高等教育機関が少ないという状況を踏まえ、そういうところでも、どのような学びが必要かについても是非、意見交換していきたい。

限られた時間ではあるが、今日を皮切りに引き続き皆さんのお知恵も拝借しながら、ともに進めてまいりたい。

**○橋本教育長あいさつ要旨**

新型コロナウィルス感染症対策については、教育現場でも、日々刻々と変わる状況に応じて、知事部局とも連携しながら対応することが求められている。

そうした中、昨夜には、国の基本方針決定を受けて、文部科学省から通知があったところであり、この後、協議に入る前に教育監兼学校危機管理監から状況説明を差し上げたい。

西脇知事におかれては、府政の最重要課題として、就任以来一貫して取り組んでこられた「子育て環境日本一」の実現に向けて、昨年９月に「子育て環境日本一推進戦略」を策定され、10 月にまとめられた「京都府総合計画」でもその第一に「子育て環境日本一」を掲げられ、知事の熱意を強く感じているところ。

最近は、「子育て環境日本一」は、「教育環境日本一」でもあると府議会でも度々指摘されているが、我々も全く同じ思いを持っており、京都府の教育の質を向上させることや安心して学べる教育環境の充実を図っていくことが大変重要と感じている。

教育こそが京都の明日を切り開く原動力だとの考え方のもと、今日のテーマである、キャリア教育を始め、未来を見据えて様々な施策の推進に努めているところ。

こうした教育施策の推進にあたっては、知事部局との連携や予算を含む様々な投資が必要となるため、西脇知事には今後も教育委員会の取組に対して、ご理解とご協力を賜りたい。

**○新型コロナウィルス感染症対策について説明（2/26 時点：山本教育監兼学校危機管理監）**

（知事のコメント）

事態が刻々と変化しており、非常に流動的な状況。我々も精一杯頑張るので、教育現場も臨機応変に対応いただき、引続き連携についてよろしくお願いしたい。

**○キャリア教育の状況について概要説明（教育委員会山口指導部長）**

・職員教育・キャリア教育の推進について

**○キャリア教育に関する主な意見交換**

（西脇知事）

まず、キャリア教育について。最近、経済雑誌にもよく出ていますが、高校生に着目している企業が非常に多く、職業系だけではなく普通科の高校生にも企業が触手を伸ばしています。

「子育て環境日本一」について議論していて思うのは、なるべく若いときから自立心を持つことが、家庭とか結婚とか子育てを考えるベースになるのではないかと。一般的には、社会とのつながりを考える最後の過程は中学、高校でということになります。その中でどのようなキャリア教育をすればいいのか、委員の皆さんからそれぞれのお考えをお話しください。

（上原委員）

教育委員として、色々な学校へ行かせていただいています。職業の生徒は、普通科より自分の将来についての意識が高いと感じます。特に工業系や農業系は、色々な道具を使うので、その道具をきちんと整理整頓してまた元へ戻すとか、終わった後の掃除とかも徹底されており、散らかっていることがありません。教室、廊下、その辺もかなり徹底していますね。

うちの職場でも、実は京都すばる高校出身の優秀な先生がいるのです。京都すばる高校を出てから大学へ行って、教育免許を取って、うちの現場に。２人いるのですけれども、やはり一味違うという感想はあります。京都すばる高校に行かせてもらったら、ああなるほどなと感じた。京都すばる高校では、幼稚園の先生として特別に学ぶことはないのですけれども、基本的な部分を非常に教育していただいているところが、さすが職業専門学科だなと思います。

あと、職業体験で、うちの職場では中学生を受け入れているのですけれども、できることならば高校でもう一度やってほしいなと思いますね。中学生は可愛らしくていいのですけれども、まだ自立するという意識があまりない。高校生になると、実際に自分の進路をしっかり考えようという時期になってきているのです。幼稚園連盟で高校生の職業体験を毎年募集して、結構来ていただいているのですけれども、幼稚園の先生になりたいから来ている高校生もいれば、どうなのかなと興味を持って来る人もいる。仕事というものを少し経験してみたいと。別に先生になりたいと思うわけではないけれども、何となく子どもと接してみたいと。

やはり高校生のほうが将来に向けての目標を定める必要のある時期なのかなと思っているのです。中学生ももちろんずっと続ける必要があると思うのですが、高校生にも職業体験を少し取り入れたほうがいいのかなという感想を持っています。

（千委員）

北桑田高校とか農芸高校、大江高校を視察させていただいて、例えば北桑田高校なんかは、木材加工実習棟などもあり、高校段階で既にある一定の技術を身につけることができるというのは大変いいことだと思いますし、京都府に色々な専門学科を持つ高校があるのは、とても素晴らしいことだと思います。北桑田高校なんかは、まさに京都だからできる環境だと思います。

これからそういう学科を作っていく高校に関しては、専門的な資質を持った教員の確保も課題になると感じました。

（安岡委員）

専門職といいますか、インターンとか、医学でいえばポリクリみたいな、そういったところでのキャリア教育の導入は本当に必要かなと思うのです。けれども、普通科ではどう

でしょうか。先程、知事が言われた子育て支援環境の中で自立心を芽生えさせていくということ、普通科の子たちにも企業が触手を伸ばしているということですが、普通科は、その段階に来てからというよりも、やはり小さい時から非認知能力を高めるところだと思います。この間、八幡小学校に行かせてもらったときに見てきましたが、小さい頃から言葉の力をつけていく。非認知能力を高めていく中で、考える力をつける。そういったところから教育することによって普通科の生徒の力がついていく。またそれが企業に反映していくのではないかなと思います。ですから、もう一つ前の段階の、幼稚園、小学校ぐらいから、そういった力のつけ方に重点を置くべきではないかなと思っています。

また、この間、大江高校に行かせていただいたとき、公共マネジメント系統とか、いろいろなデザイン系統とか、非常に多くの選択肢がある。そこがたいへん魅力的だなと思うのですけれども、これに対して先生は本当に全てをこなしていかなければならないし、専門的なところを出していかなければならないとなると、中身がスカスカになっていかないかなと。名前倒れになれば、それはいかがなものかとも思います。そのようなところについてやはり力を入れていただければありがたいなと思います。

（安藤委員）

皆さんと重なる部分もあるのですが、普段、子どもたちや保護者とお話ししている中で感じるのは、専門学科だとか普通科を選ぶ前に、体験が十分にできていないことです。子どもたちの生活の中で色々な大人に関わる体験活動が非常に少ないのではないかと。研究校や、外部講師を呼んで色々な体験をさせてくれる学校の子どもたちは非常に目がきらきらしているので、色々な大人のモデルに触れ合う体験も非常に必要ではないかなあと思います。

先ほど上原先生がおっしゃったように、中学校での職場体験はもちろんあるのですけれども、地域によっては限られた職種の体験にしか行けなかったり、自分の行きたい職種がなかったりというところがあります。中小企業はもちろん、大きな企業も含めて、もう少し企業と学校との連携も深めていかなければいけないなと思います。

また、高校生、特に普通科の高校生は、大学受験をすることを前提にしたお子さんだけでなく、家庭の事情で大学に行かない生徒もたくさんおられます。その子たちは非常に無防備な状態で社会に出るということが起こってきます。そういうことも含めて、小さい時から大人と関わるような体験をもっともっとしていくべきではないかなと思います。

もう一つ、教員の資質をもう少し上げていけばいいのかなと。先生たちだけでなくて、多くの企業が学校にもっともっと関わっていけたらいいのかな。もちろん保護者も。例えば、極端に言えば、保護者が教壇に立ってみるとか、高校生を先生にしてみるとか、もう少し広がった活動ができたら面白いのかなと考えたことがあります。

（橋本教育長）

普通科について、今、国でも見直しの議論がされているのですけれども、中学に比べて満足感が低い、学習意欲が低い。この頃は大学に入りやすくなって勉強時間が短いということで、今のままでは将来どうかなと言われています。

普通科に対比すると、職業学科は確かに入ってきた時から出る時までの成長の度合い、伸び代が非常に大きい。なぜそうなるのかなと思うと、一つにはやはり出口で働く、社会に出ていくということを意識しているということがあります。そのために、資格を取る、あるいは様々な実習をする。それから、皆さんが言われているように、社会とつながった色々な体験ができる。大人との触れ合う機会も多い。この辺に良さがあるのかなと思っています。

私は以前からずっと思っているのですが、本当はもっともっと職業学科を選んでほしいなと。ただ保護者は大学への進学を考えるので、多くの方が普通科に行かれる。それであれば普通科に職業学科の良いところを入れ込めるようなカリキュラムを組んでいけないのかなという思いがあります。

それから、安藤委員がおっしゃったとおりで、教員の質を上げることはもちろん大事なのですが、今これからの時代を考えた時に、学校の中だけで、あるいは先生が全てを教えているということではもったいないなと。本当に、一流企業、様々な企業、あるいは地域にすばらしい方がいらっしゃいますので、そうした方々がどんどん学校に入ってこられるように、より学びの幅、世界を広げていくような取組が大事かなと私も思っております。

（西脇知事）

ありがとうございました。短い時間の中で示唆に富む話をたくさん聞かせていただきました。

これは色々なところで言っていますが、昔は、地蔵盆などで、小学校に上がったぐらいの子どもでも、上は中３ぐらいのお兄ちゃん、お姉ちゃんとの付き合いがありました。区民運動会などでは、いろいろなタイプの大人がいるし、色々な人を見てきたものです。

ですから、「色々な大人のモデルに触れ合う機会」というのはキーワードとして素晴らしいと思います。こうした機会がなくなっているのは、地域のコミュニティが崩壊していることともつながっているのですが、一方でコミュニティが保たれているところもあります。小学校区単位でいえば、学校とコミュニティの連携がうまくいっているところは、学校の評判も上がっているし、地域も活性化しています。地域と学校を結び付けることが、今の話を聞いて非常に重要なのかなと思います。

こういったプログラムは、最初は手間がかかるので、その手間を学校の先生にお願いすると大変です。実際、地域の一部小学校で教壇に立っている方がおられますし、地域には色々な大人が大勢いますから、そういう人とコネクティングをつけてきちんとやれればと思います。色々なお話をありがとうございました。

**○府内の就職者を増やし、早期離職者を減らすための意見交換**

（西脇知事）

次は、特に橋本教育長にお願いしたいことがあります。

というのは、単なるキャリア教育だけでなく、大学、高校を卒業した人になるべく京都で働いてもらいたい。非常に定着率が低く、とりわけ北部の地域は、福知山公立大学、４年制大学が一つしかないということもあって、人口統計を見れば明確で、合計特殊出生率は府内全体の平均が 1.29 ぐらいで、北部は 1.7 とか 1.8 ぐらいまであるのですが、18 歳から 25 歳までの人口はほとんどいない。25 歳を少し超えると戻ってきているのか、また少し増えているのです。

今、北京都のジョブパークで「Ｕターン登録」をやっているのですが、京都の登録率は 9.0％です。同じようなことをやっている北陸の数字を紹介しますと、富山では 60%、石川でも 70%、福井県では 60％ということで、かなり多い。

「Ｕターン登録」とは登録するだけなのです。高校を卒業する時に教育委員会を通じて本人と保護者、場合によっては保護者だけの場合もありますが、同意をもらって連絡先登録をしてもらうと、その後色々な情報が送られるということになっています。

まずこのＵターン登録の比率を増やしたい。まずはぜひよろしくお願いしたい。これはお願いです。

もう一つは、新卒者が就職したら３年以内に３割の人間が辞める。「３年３割」を何とか食い止めたい。

これについては労働経済活力会議で議論しています。例えば、なるべく早く、大学１、２年生の頃からジョブパークと連携する。高校を卒業して就職して辞職する人は、大体、入社から半年以内に兆候が出ているから、何か原因があるはずなので、企業でももっと早めにその対策を打とうとか。そもそも親が大企業志向で、本人は優れた中小企業に行きたかったのに、結局親の意向に負けて大企業に入ってすぐに辞めてしまうのではないか。本当のところは分かりませんが、多分これは普通科の生徒に多いケースでしょう。

どのように自ら納得のいく職業選択を行ってもらうか。府内の就職者増加、早期離職者を減らすために、何かお知恵があればお願いします。

**（橋本教育長）**

相当前にＵターン登録のお話が出て、資料を見ていたら、540 名の登録者があった次の年が 25 名でした。なぜかと思って聞いたら、540 名の時には学校で、その場でＵターン登録をさせたので非常に良かった。翌年は登録用紙を家に持って帰らせて、ちゃんと書いてくる子だけ集めたと。それでこれだけ減ったというのです。ひょっとしたら、翌年の 25 名の方が意識が高いのかもしれませんけれども、登録数を増やすこと自体はそれほど難しくありませんので、そこは少し考えさせていただきます。

早期離職のことは、小畑委員とも何回かそういうお話をさせていただきました。これは

色々な面がありまして、一つはさっき知事からもご指摘がありましたように、特に普通科の離職率が高い。工業・商業高校の卒業者は、大学卒業者以上に離職しないところも多いわけで、やはり高校にいる間にどれだけしっかりとキャリア教育をやってきたかという差も一つはあるなと思います。我々ができることとしては、そこをしっかりやる。先程も高校の段階での職業体験をというお話がありましたけれども、色々な面で今、普通科の職業教育は薄いなと思っています。

あとは、どうつないでいくかということで、早期離職者、離職した人に次のチャンスが与えられるようなシステムをどう構築するかだと思っています。もしそういう仕組みが出来上がれば、高校の早い段階から、そういう仕組みがあるんだよということをしっかり先生から伝えていただけます。そうなると、困った、少し何か違ったなということで辞めたときに、相談に行く場が明確になるので、その辺はできるかなと思うのです。

ただ、高校を卒業した生徒を、高校の先生が追いかけるというのは、なかなか難しくてできない。職業学科の場合、特に学校求人のような場合には、先輩たちがずっとつながっていますので、ある程度追いかけられると思いますが。普通科でもそういうことができれば一番いいのかもしれませんが、多分そこは無理だと思うので、やはり在学中にしっかりシステムを周知して、戻ってくる場をしっかり意識させるということかなと思います。

（安藤委員）

先程と重なる部分もあるのですけれども、まず小・中学生が学校を選ぶ時の基準が全然明確じゃない子がたくさんいて、体験活動の格差ももちろんあるのですが、専門学科を選ぶお子さんたちは、やはり保護者がレールを敷くような部分もあったりするので、その辺が少し問題かなと思います。あと中学校、高校の進路担当の先生の意識の改革も少し必要ではないかなと思います。

（安岡委員）

こういう話の中でいつも思うのですけれども、これだという原因はないと思うのですね。それぞれの要因がいっぱい重なった中で、こういう方向に世の中がいっているのだと思います。色々な方の話を聞いていますと、例えば子どもさんが就職するのに関して、雇用保険はきっちりしているか、給料の上がり方がどうかなどを親がまず調べて選択し、子どもに「ここへ行ったらどうだ」と言う場合が結構多い。そういったところを含めて難しいですね。色々な考え方がある中で、世の中の流れに沿って物事を見ていくことがやはり必要になろうかなと思います。ここを直したからこれがうまいこといくというのはなかなか難しい。先程から言っているように、一つのものをずっと一緒になって押し上げていく形を構築できればなと思っています。

（千委員）
　若い人はすぐ仕事を辞めるという問題について、私もよく分からないのですが、少し安易に辞める、確固たる理由なく、つまらないからとか、しんどいからとか、多分今はそういう人が多いのではないかと思うのです。そうなると、ほかに勤めたにせよ、また同じような理由で辞めるのではないかと。
　少し無理かもしれないのですが、例えばどこの学校から来ているという意識をもう少し明確に、誇りを持ってもらえるようになると、その学校の手前、あまりばかなことはできないなみたいな。またその学校から後に続く子どももいるのだよということでも、少し何か引っかかってくれるようなことができていくといいのかなと、少し漠然と思いますけれど。

（上原委員）
　ネット情報ですけれども、今、「固定電話恐怖症」といって固定電話に出られない若い人がたくさんおられるそうです。自分の携帯は出られるのです。誰それから電話と名前を確認してから電話に出るので、最初から安心して出られる。けれども、社会に出るとそういうわけにいかないので、そこでまず大きくつまずく人が今増えている。会社へ行って、当然、新人はまず電話を一番に取れと言われる。それができない。また電話に出ても対応ができない。ちょっとしたクレームでもつぶれてしまう。固定電話恐怖症という病気があるというのをネットで見て、私も前から少し感じていたので、すぐ納得しました。
　あと、対人関係が全くできないというか、仲間内ではいいけれども、上司や先輩から少し注意されただけで心が折れてしまう。ストレスに弱い。
　教育というのは、ストレスフリーではなく、ストレスに打ち勝つことを教えるのが、本来の教育だと思うのです。ただ、今の保護者は子どもにストレスをかけちゃいけないみたいな風潮があって、特に若いお母さんは、子どもにストレスをかけないで、すくすくと伸びて育ってほしいみたいなコメントが多いのですけれども、逆なのですよね。
　知事がおっしゃったように、昔は地域の親分がいて、子ども同士だけでもいろいろあって、もまれて育っていったのが、今はあまりにもなくなって、すくすくと育つのはいいのですけれども、ストレスに弱い。ストレスの経験がない。便利な携帯とかグッズがあって、大学生もキーボードが打てず、就職が決まってから初めてパソコンのキーボードを習うとか、いろいろな話がいっぱい聞こえてくるのですけど、やはり便利になれば便利になるだけ人間が弱くなったのかなという気がします。

（西脇知事）
　ありがとうございました。
　本当はこのあと特別支援学校についてもお願いしようと思っていました。これはお願いだけにしておきますけど、特別支援学校にはやはりジョブパークとの連携がどうしても必

要だと思っていますので、引き続きお願いしたいと思います。

今、千委員もお話しされましたが、キャリア教育の問題は、実は人口減少社会や少子化とも多分関係していると思われます。職人の世界でもどこでも、年齢が段階的にいかず、中間の世代が少ない。実は霞が関でも部下がいない係長がいっぱいいます。年齢が近ければ話が通じますが、年が極端に離れていると、ちやほやするか、頭ごなしで怒るかになってしまう。いろんな年代の人がいれば間をつなぐ人がいるのですが、今は非正規も含めてギリギリの人員でやっているので、そんな余裕もないのだと思います。本当に役所もラインで仕事をしている人は非常に少なくなってきていて、昔は直属の上司に色々なことを教えてもらったのですが、今はあまり行われなくなってきている。そういうのもあるのかなと思いました。

それと、橋本教育長がおっしゃいましたけれども、やはり次のチャンスを与えることは非常に重要です。仕事を辞めたら、すぐにそのままひきこもりになるみたいなパターンがあるので、早目に、辞めたらすぐジョブパークにでも何でも行ってもらって次に行く。

今はとにかく人手不足なので、かなり門戸が開かれているのですが、結局、そのチャンスをいったん逃すと、なかなか戻れない。長い間ひきこもっていた方を外へ連れ出して職業訓練をして、雇用のマッチングをすることは、大変な手間がかかるのです。橋本教育長がおっしゃるように、もし合わない職場であれば辞めて、次に行くところがチャンスかなと思っています。リカレント教育とは少し違うような気もするのですけれども、頑張っていきたいなと思います。

基本的に、キャリア教育は「子育て環境日本一」のイメージとは若干違っていて、人口減少社会において日本の力をトータルで強めていくための戦略として極めて非常に重要だということが、これからどんどん認識されていくと思います。企業側にはすでにその認識があり、早め早めから社会を意識するような教育を行っていく流れになるはずだと私も確信しています。

今日は少し時間も短かったのですが、そういう観点を確認することができました。

最初の教育長のお話にありましたけれども、子育て環境日本一は教育環境が日本一でないと絶対実現しないと言われております。昔から教育環境が良ければ、それだけでも移住してくる人がいっぱいいるとも言われています。粘り強く頑張っていきますので、引き続きご支援をよろしくお願いしたいと思います。

今日はどうもありがとうございました。

（終　了）